

新島襄の英語の手紙

——『新島襄全集』第六卷

B・D・タッカー

『新島襄全集』第六卷（同朋舎刊、四四七ページ）は、十九世紀日本の教育界における最も重要な指導者の一人であり、また偉大なキリスト者であった人物の英語の手紙の集大成であり、上品な、すぐれた装丁のもとに出版された。新島の生涯や同志社の創立と初期の歴史についての詳細を知りたければ他の書物に依るべきであるが、ここにはじめて編集された手紙は、偉大な指導者の魂を、他のどこにも見出し得ないようなかたちで示してくれるものである。

その理由は、新島が最高の理想と不動の目的をもった強力なキリスト者へと成長をとげる決定的な発達期が、まさしく海外における

彼の青年時代だったからであり、当時のほとんどすべての手紙は英語で書かれている。彼の英語の手紙は彼が日本を脱出してアメリカまで船で渡った時から、彼の永眠する年までに及んでいる。しかしながら、新島の性格の発達を理解するために最も重要な時期は最初の十年間なのであり、それは海外ですごした十年間ということになる。彼がキリスト者になったのも、多くのクリスチャンの友人の愛と親切を経験したのも、キリスト教神学を含めてすぐれた教育を受けたのも、日本に偉大なキリスト教主義大学を設立しようというヴィジョンを抱くに至ったのも、すべてこの期間においてであった。

新島のキリスト教への改宗はすでに日本で始まっていたのだが、それはアメリカに到着した後すぐに完成した。しかし彼は洗礼を受けて教会に参加するより前から、日本の友人にむかって、救い主イエス・キリストについて手紙を書いている。新島は新しい信仰に完全に身をゆだね、全生涯をそれに献げる決心をする。彼の信仰はきわめて福音主義的であり、初期のニュー・イングランドのピューリタンの熱情を多くとどめている。彼はアメリカのクリスチャンたちに語りかける時には非常に謙虚でへりくだっているが、彼の恩人、すなわち彼をワイルド・ロウヴァー号に乗せてアメリカまで連れてきてくれたホラス・S・テイラー船長の突然の事故死の与えたショックは大へんなものであり、この時彼は船長の親族にあてて力強い手紙を書いている。彼は当時二十六歳で、受洗後二年たったにすぎなかったが、彼は親族の人たちにむかって、キリストに身を献げるようにと許えている。

友よ、救い主とあなた方との間に何の障害があるのでしょうか？ 主の御許に

来るには誇りが高すぎると言われるのですか？ 主があなたをへりくだる者として下さいます。そうするには弱すぎると言われるのですか？ 主が支えて下さいます。そうするには忙しすぎると言われるのですか？ 主が貴重な時間を備えて下さいます。そうするには疲れすぎていると言われるのですか？ いいえ、主が甘美な休息を与えられます。(六三―六四ページ)

新島の最も強い特質の一つは、彼を新しい信仰へと導き給うた天父に対する感謝の念と、彼に神のめぐみを示してくれた人々に対する感謝の念であった。彼は自分自身――自身の表現を使えば「このあわれな家出の子――に対してあれほどの親切をつくしてくれたアルフィアス・ハーディー夫妻に対する感謝の思いが、とりわけ篤かった。彼は夫妻を愛と絶大な従順さをもって両親と見做し、夫妻の助言を求め、どんな状況にあっても夫妻に従う意図を宣言している。英語の手紙から察せられる限りにおいて、彼はすべてのアメリカの恩人たちに対して同様に感謝の念を表明し、彼自身の日本の両親や友人に対

してよりももっと卒直に胸中の希望、夢、困りごとを打ち明けている。この故にこそ彼の英文書簡は、彼の人物を理解するのにきわめて貴重だといえるのである。

新島は道徳的な義務を負う人々に対しては従順に身を処したのであったけれども、ピューリタン主義の道徳的きびしき、個人の独立性と勇氣といった考え方を吸収していた。彼の道徳観念は他人の意見に依るのでなく、神の御前における彼自身の良心に依存した。彼は非常にきびしく安息日を守り、安息日にはぜひやむをえない場合以外は旅行をしなかった。日本への帰途、サン・フランシスコへの列車に乗っていた彼は、安息日に旅行することを欲しなかったので、ワイオミング州の小さな辺境の町で下車した。他の旅行者は彼に、このあたりは安全でなく、「ミシシッピ川より西では安息日というものは存在しないですよ」と告げた。しかし新島は彼らに耳を貸さず、「安息日を守るのに誰の世話にもなるつもりはありません」と述べている(一四五ページ)。

同様に彼は、京都にキリスト教の学校を開くことはできっこないと教えられた。彼はそ

れにも耳を貸すことなく、神の御導きを信じて従っていった。彼は至るところで困難に直面した。宣教師たちでさえ危懼の念をあらわして彼を批判したけれども、彼は神が共にいますことを信じて、勇氣をもって前進した。彼は書いている。「私たちは役人や僧侶に憎まれていますが、すでにここに真理の旗を打ち立てたのですから、もはや、退却することは、ありません」(一七五ページ)。

これらの手紙は山本覚馬、森有礼、田中不二麿、その他大勢の人々の姿をごく近いところで見せてくれる。手紙は岩倉遣外使節団に随行した時のアメリカでの彼の生活や、初期の同志社のもようを詳細に示してくれる。新島の英語の手紙がはじめて一冊にまとめられたことは非常に有難いことである。将来他的手紙が出現するかもしれないが、この書簡集に入っているものこそは彼の手紙のうち断然最重要の部分であると断言して差支えない。

この書簡集は正確な本文を揃えて、行届いた編纂がなされている。オーテス・ケリー教授と彼を助けた人々はすばらしい仕事をなした。すなわち手書きの手紙から生じる多くの困難を乗り切り、読者に対し、すべての

重要な点において、原書簡に忠実でありながらも、なおかつ明瞭で読み易い本文を提供したのである。校正の面でも最高の水準を示している。ミズプリントは殆どないが、みつかったものは全く取るに足りないものだった。野鳥の観察を趣味とする者として、一つだけ小さな指摘をさせて頂きたい。一七三ページで新島は「梅はまっさかりで、かわいらしいオリヴがいい声で鳴いています」と書いている。むろんこの「かわいらしいオリヴ」は意味をなさないので、編集者は「*oracles*」を挿入している。しかしアメリカムクドリモドキは日本に生息しないし、コウライウグイスは九州あたりで稀に見掛ける程度である。私の意見では、新島が言いたかったのはまさにウグイスそのものだったのであり、それこそ梅と組合わされてびったりなのである。新島のまちがいは自然であるといえる。というのは、ウグイス色は時としてオリヴ色とも呼ばれたからである。これは新島が時に英語で犯す面白い小さなミスの一例である。彼の英語は完全ではなかったが、それは力強い、表現力に富んだ英語である。しかもそれは彼のまじめさと、深い感情を伝えるものであ

る。彼の手紙を読むことは感動的な経験である。その文体は多くの英米人のそれよりもすぐれている。事実これらの手紙はめったに見出されないほどの明快さでもって、きわめて偉大な人物の心を映し出すものである。同志

(大学文学部教授)

邦訳 北垣宗治 (大学文学部教授)

「同志社談叢」

第三号 (一九八三年三月)

「悲劇の日本銀行総裁」・深井英五 (山)

……… 杉江 雅彦

——金融政策の激動期を生きた同志

社人——

ある明治の軌跡…………… 相川 尚武

——市原盛宏小伝——

わが国初期看護教育における京都看

病婦学校の位置づけについて

……… 亀山美知子

同志社の近代建築 (中)…………… 前 久夫

——遺稿と資料——

資料

理事会決議録

——自・明治三十七年三月二十八日

至・明治四十五年五月二十一日——

日本基督教伝道会社第九年会記事

新島裏に関する文献ノート・その2

……… 河野 仁昭

第四号 (一九八四年三月)

アーモスト館五十年の歩み……北垣 宗治

新島裏と恩人セイヴォー船長

……… オータス・ケリー

同志社の近代建築 (下)

……… 前 久夫・山形政昭

——遺稿と資料——

資料

同志社常議員会録事

——自・明治二十三年四月三日

至・明治三十一年七月六日——

組合教会臨時総会記事

——明治二十一年十一月二十三日——

二十八日——

新島裏に関する文献ノート・その3

……… 河野 仁昭

発行・同志社社史資料室

取扱い・同志社収益事業課

(電〇七五―二五一―三〇三七〇ハ)

新島漢詩漫筆

小川与四郎

新島先生が生涯に遺された漢詩は、今日ののくらしい集めることができるだろうか。新島漢詩に関心を寄せる者にとって大変気になるところである。そして、完成・未完成を問わず、一首でも多いことを念するのである。

数年前になるが、既刊の伝記・言行録・書簡集・詳年譜・その他に散見するものを拾ってみると、少年期の練習作四首をも含めて五十首近くを集めることができた。だが、見落しがあるかも知れない、また未刊の史料によればもっと出てくるのではなからうかと、かすかな期待を持ち続けてきた。

最近発行せられた『新島襄全集』第五巻をみると、ありがたいことに漢詩・和歌・俳句

合わせて百十九首がまとめて載せられている。そのうち漢詩は、五十一首（整理番号1～51）である。かすかな期待はいくらか報いられ、「自出函城已七日」（番号12）・「身期成業抛文筆」（番号31）・「皇天本仁愛」（番号51）の三首を新たに知ることができたのは、まことに幸いである。なお、一見して先生の作ではなく、恐らく何かの手違いで紛れ込んだと思われぬ一首（番号38）があるが、これは当然削除するとして、今のところ先生の漢詩遺作は最大限五十首を数えることになる。そして、この五十首を長い作詩中断期（数え年二十四歳～四十一歳にかけて）を境として分けると、前に二十首（番号1～19

と51）、後に三十首（番号20～50、うち38を除く）ということになる。

こうしてみると、先生の遺作は意外に少ない。それは、散失によることは言うまでもないが、二十年近くもの長い作詩中断と四十八歳での早世に大きく起因するであろう。言うまでも詮ないことではあるが、晩年次第に詩情も高まりつつあったことを思うと、四十八歳での早世はなんとも惜しまれてならない。だが、長い作詩中断後の七年間に三十首もの詩を遺され、あの「寒梅」の詩にみられるような高い詩境を示して昇天されたことでせめてもの慰めとしなければならぬだろう。

遺作の少ない最大の原因は、なんといっても余りにも長い作詩中断である。普通ならば最も多く作詩されてもよい二十代半ばから四十代初めにかけて一首もないのは、恐らく米国での生活において意識的に漢詩・漢文の類を遠ざけた結果であろう。米国よりの弟双六宛書簡（慶応三年、二十五歳）に、「詩作に暇を費やさぬ様にいたし度候」とか、「国を去てより一切漢の書物を読め故往々漢語を忘れ申候」などの言葉をみる。脱国の際韻書・漢詩集・その他漢籍の類を携行することはで

きなかつたであらう。だが、船中あの「男兒決志馳千里」の詩をはじめ八首の詩を作り、幾多の辛苦と限らない不安に耐えながら自ら己が心を励まし、また断ち難い恩愛の情を切々と詠い続けたことを思うと、短い詩の一つや二ついつでも作れたはずである。そうは言っても、異国での新しい学問に真剣に取り組み、キリスト教信仰の道に直進して行った時期であることを思うと、書簡の言葉もまた、そももあらうかとうなずかれるのである。

「……往々漢語を忘れ申候」は、気持ちとしてはそうであらうが、いくらか謙遜と誇張があるとも受け取れる。それに比べて、「詩作に暇を費やさぬ様にいたし度候」は、かなり実感のこもった自戒の言葉と思われる。憂国また憂国、救国の手段を万里の外に求めた先生は、山路愛山風に言えは、成功した吉田松陰となつて米国の地を踏んだ人であり、その心はほとんど幕末・維新の志士の心と異ならないだろう。若い頃の先生の詩は、時には激しい青年の苦悩の跡をとどめ、やがてその苦悩をも振り切つて敢然と報国の道に駆け抜けようとする熱血の志士の声となり、技巧を越えて人の胸を打つものであった。そうした

先生がなぜ詩を作らなくなったか、それは前述したことだけでも一応は理解できる。それではなぜわざわざ詩作を厳しく戒め、どんなに多忙とはいえ、実際に一首もとどめなくなつたのか。一般的には、歌や俳句はともかく、詩はかなり暇を費やさなくてはできないものである。即興性の強い志士の詩であつても、どんなに短いものでも、やれ脚韻だの、やれ平仄だの、起承転結の展開だのということになると、かなりの時間が必要であらう。欲するがままに作れば、成業を期して日夜勉強する者にとって苦痛となり、邪魔なものともなる。三十歳で武蔵の野辺に散つた吉田松陰は、若い頃一時、「詩文書画、皆玩物志を喪ひ、閑思日を消する魁なり。その害固より淫声美色に過ぐ。」（『講孟劄記』）とまで言つて、詩文書画の欲を除去して国防の研究に努めたという。あれほど詩歌・文章を遺した松陰にして時にはこれである。志士にとつて詩歌は、己の思想・行動の証ではあるが、それほどこまでも余事であり、閑事であり、詩は特に時間を要するものだけに、それに耽ける大切な志を失わせるものともみられたのである。先生が滞米中前述の自戒を固く守つて

自ら欺くことをしなかったのは、強い意志の持主であつたからであることは言うまでもないが、また心のどこかに詩歌また閑事、玩物喪志の恐れのあるものとする志士の詩歌観があつたためと言えないだらうか。こうして、詩の筆を捨てることは、決して詩に対する愛好そのものを捨てることではない。松陰も後には、「頗る少時と所見を異にす。詩文の如きは、興来れば亦作る。意生ずれば亦述ぶ。興去り意尽れば則ち止む。謂へらく、人情情あれば思慮あり、思慮あれば言語あり、言語あれば詩文あり、是自然の勢なり。」（『講孟劄記』）と言ひ、「未だ嘗て樂しみを以て本心を蔽はず、却つて樂しみを以て本心を起すに足るのみ。」（『同』）と悟っている。余りにも滞米期間の長かつた先生は、詩作についてのこの悟りに至るのは遅れ、帰国後九年を経てようやく詩作に立戻つたのである。

帰国後の多忙な伝道・教育活動の中では、再び若い頃のように漢詩に親しみ、作詩することなど容易に望むことはできなかった。死の約一カ月前になつてもなお、「詩は此二十七八・八年全廢に罷在近來甚無風流にして更に詩思も起り不申候」（吉田賢輔宛簡書）と言

っている。実際には、この時より約六年前に「北風弘浪揺動」・「休言世事多難險」の二詩から再び作詩しはじめていたのである。

『新島襄全集』第五巻で新たに知った一首に「身期成業抛文筆 二十年間不作詩、……」と詠っている。これは新島公義の筆になる『第二回外遊記（B）』の、明治十七年八月六日の項に初出というから、かの「多年辛苦期成業、宿痾使吾及此行、……」の詩とはほぼ同じ頃、スイスのルツェルンで作られたものである。「二十年間不作詩」も、「二十七・八年全廢に罷在」も、たとえ謙遜の言葉であつたとしても、帰国後も漢詩に親しむ十分な余裕のなかつた先生の素直な気持ちでもあつたであらう。

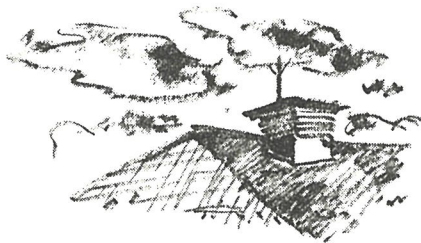
帰国の翌年春三月、大阪からの父君民治宛書簡の中で「……久しぶりにて日本の春を迎へ鶯の声にも別して面白く幼少の節に覺へし所の詩歌杯を思い出し毎朝起ぬ先に詩歌を吟誦し……」とある。日々匆忙の間にも日本の自然に接し、ほんの一時の風流の気分を味わつたのである。また、国内旅行の途次各地で偶然目にする詩歌、維新以後前代にもまして発展し続けていた明治の詩学、川田蕤江や木

戸松菊のような詩をよくする人との親交、熊本バンドの連中のような事ある毎に自作・他作の詩を吟じて気炎を吐く学生たち、これらもみな先生を詩の世界に引き戻すものであつたろう。こうして、徐々にではあるが、本来浅くない先生の風流心はゆり起され、若い日の思い出とともに漢詩に対する関心が高まり、自然に诗情も湧き出るのを覺えたのである。松陰のような悟りを口にすることは一度もなかつた。だが、いつの間にか滯米中の詩作を禁ずる戒めは解かれていたのである。そして、先生は多くの場合謙遜と恥じらいをも

つて己が詩を他に示した。「平仄韻字等おぼつかなし」、「生の不文兄の知る所」、「小生の文詞に思を寄するは恰かも猿めが人間の真似を為すの類なり」、前掲の「……近來無風流にして更に詩思も起り不申候」などの言葉がそれである。また時には、「長江千里碧漫々」の詩の場合のように「此れは近作中上出来と存じ候君如何となすや」と、己が心情を鮮明に伝えることのできた満足感を素直に表わすこともあつた。こうして最後に、死の一週間前の横田安止宛書簡に「詩人の如き奇麗なる詩は少しも出来不申候、阿々。」と笑いな

ら己が詩を評したのである。これはまた、詩は志を言う、詩人の詩に非ずとも、丈夫の慷慨こそ愛すべきものとの考えを示したものともいえる。青年期の志士の詩の風は終生変わらず、今もなお人の胸を打ち続けて止まないのである。

（香里中学・高等学校教諭）



『キャンパスの年輪』

山 本 典 子

—本のこと—

チャペルの時間を終え、彰栄館の教室に戻り授業も落ち着いた頃、窓からはんやり時計台を眺めていると、讃美歌のメロディが鐘の音で聞こえた。「安かれ、我が心よ……」と。朝と昼に鳴らされる本物の彰栄の鐘のガラッ、ガラッという響きよりも好きだった。どういうわけか今ではあの頃のようにには聞こえない。

キャンパスの思い出は記憶の中でもとりわけ深いところに住むらしく、忘れてそうなんでもない情景が時に、ふっとよみがえる。心は同志社キャンパスで育まれたと思う一瞬でもある。

河野仁昭氏の『キャンパスの年輪——同志

社今出川校地——』を手にし、ただ美しいイメージだけを持ちがちなキャンパスには、一方ならぬ歴史が秘められていたのだと気付いた。重要文化財だけでなく、すでに姿の無い木造の教室にもいたわりを感じる。社史知識の浅い私にとって、大学広報に連載中からフアンだったこのシリーズが一冊になり、まとめて読めるというのはたいへん嬉しい。

実は昨年夏、この本にも収められている『熊本バンドの故郷』の掲載された大学通信にぎりしめて、私は熊本に出かけた。ほとんどその内容を確かめるように歩いているうちに、河野氏の文章の中には深く裏付けされた史実があることに改めて気付き、舌を巻いたのである。

何げなく使っている建物、見すごしてい

る樹々にもいろんなエピソードがある。目に見えるところ、見えないところで同志社を支える努力があり、繁栄があり、苦難があった。生きた人々の姿が浮かび上がってくる。それを一つ一つキャンパスの上で確認できるのだから何と楽しいことだろう。

—河野氏のこと—

著者の河野氏は同志社の職員であり、先生であり、しかも詩人であることは周知である。何とも不思議な人だ、というのが私の第一印象からこちらである。

社史資料室長として『同志社百年史』『新島襄全集』の編集という大事業を手がけておられる。だから、社史の生き辞引、というイメージを持っているのは私だけではない。ひょっとすると百年くらいクラーク館あたりに住まいしておられ、全部ご自分の目で見てこられたのでは?!という錯覚をするのである。もちろんそんなはずは無く、入社三十三年、いろんなベージを持った興味深い人である。本文はどれも見えるような記述で、かつ読む側の想像を拒まないが、ご自身の在職にかかわるいくつかは、百十年の年輪の中でも一層の鮮やかさを感じとれる。

例えば、本文の『学生会館』の最後、本館オープンの際の一文に「——あのときの彼らの紅潮した顔と興奮のどよめきを、わたしは生涯忘れることはないだろう——」とある。

あの日、学校からはオープンの決断が伝達されていなかった。が、学生は列を作って集まってきている。もうこれ以上待てない状態というとき、当時会館の責任者だった河野氏は全責任を自らが負う覚悟で決断された。オープンしよう、と。「足が震えたで。」とその時のことを話して下さった。

赤レンガの建物は一目で歴史を感じさせ、誰が見ても美しいと言う。けれどもキャンパスに対する愛着はそれだけではなく、そこで過ごすうちに生まれる人と人とのつながりの中で育まれるものだ。建物の真の価値は、そこにまつわる人々の物語にある、と河野氏は言われる。それを語り伝える者がいなくては。「——語り部やな。」と、自らを表現なさるに実に謙虚で地味な一言を選ばれた。しかし、「冒険心とか好奇心とかは年とつたら無くなるかと思ってたけど、僕は無くならへんな——。」と話しておられたこともある。本当はこの辺に不思議人間の根がある、とお見

うけするのだが。

——自己紹介など——

ところで私は同中、岩倉、同大を卒業後、アーモスト館に三年間勤務した。しめて十三年。今出川キャンパスには十年通ったことになる。その間、同志社タイムスのレポーターを四年勤めさせて頂き、ささやかながらキャンパスの様子を校友の皆様におとけしている。先の熊本行きも、実はそのためだった。

同志社に通った日々は、ほんの一コマながら、私の乏しい人生においては大きな比重を占めている。十年間は教育を受けるとばかり、あとの三年もとても同志社に役立ったとは思えないが、キャンパスをベストに維持することの大変さをかいた間見たようにも思う。

私の職場だったアーモスト館は美しい建物である。その使命も歴史も。ただ近年傷みが目立つのが憐れである。本文には『アーモスト館』と『アーモスト館の脇道』で登場している。樹々がどこよりも多く、四季折々に葉だけでなく花、花粉、木の実と次々に、かつ大量に降るので、庭守りをする人をいささかうんざりさせることもある庭だが、「ささやかな贅沢」という形容は、まさに言い得てい

て妙である。私はアーモスト館での出会いを忘れないでおこうと思う。

——エピソード?——

緑と赤レンガ、彰栄の鐘、エトセトラ……のシャワーを浴びるか否かで同志社人としてのカラーが変わるんじゃないか、と心配している友人がいる。それほど私達は今出川キャンパスに郷愁を持っている。この本の題名に「オールド・キャンパス」を考えておられたことがあとがきに書いてあった。オールド・キャンパスというと増々懐かしいもののようには思えてくる。が、今出川キャンパスもたえず新旧の波に洗われてきた。これから「キャンパスの年輪はさらに未来に向って限りなく重ねられていくだろう」と河野氏が思っておられるように、新たな物語の展開が始まる。だから心配はいらないだろう。

何年か前、オーテス・ケリー先生にアーモスト大学へ連れていってもらった時、よその大学という気がしなかったものだ。「キャンパスの年輪」、その核にあるのはアーモストの丘に立つ新島先生の心である、と心から思った。

(本部職員)

新島襄と福士成豊

千代 肇

同志社大学の新島シニア・キャンプが函館で開催され、今年で五回目を迎えようとしている。

例年、早朝の一日は、新島襄が渡航を決意して密かに小舟に乗って出航した外人居留地跡で礼拝を行なう。先輩の白川鄭二牧師が新島先生の遺髪を手に、日本脱国の決意を情熱をこめて講話され、渡航の碑が建てられたときの経緯が話される。現在地に碑が建てられたときは、私が学生ときで、大塚節治総長が列席して除幕式が行なわれた。

この碑は、現在函館の観光の名所となっているが、何故か最初の外人居留地跡であ

ることよりも、新島襄渡航の碑が有名で、近くには、新島先生にあやかっていた名前の軽食の店までできている。外人居留地跡の石垣や小舟で脱出した渡戸場も昔さながらの姿をとどめている。ただ築島の橋がなくなり、両側に倉庫が並んでいるのが残念であるが、渡航の碑は築島の中央の通路の奥まった港が一望できる所にある。

この地は、青年新島七五三太が大志を抱き、西欧文化の必要性を感じて国禁を犯かしてまで渡航した所である。命をかけた情熱は、常にわれわれの励ましとなっているが、同罪の死刑と家の断絶を覚悟して自ら密航を成し遂げたのは福士屋卯之吉、成豊

であった。

福士成豊は、日本人として最初の気象観測所を設けた、日本気象台の創始者でもある。その技術は、直接外国人から学んだ。彼は、造船技術、三角測量による地形、港湾の測量、鳥類の研究や剝製技術など広く西洋文化を習得した科学者でもある。

幕末に西欧文化を学ぶには、直接海外に留学するか、日本で外国人から学ぶしかなかった。外人教師を招いて学ぶようになったのは明治になってからである。卯之吉があえて青年新島七五三太を米国商船に手引したことは、お互いが共通して西欧文明の偉大さに感動し、お互いが共鳴し合ったからである。

卯之吉は、新島に会ったときすでに外国人から英語を学び、その知識を習得していたし、外人居留地でも外国人から親しまれていた。当時を考えると、幕府は箱館開港にあたって、西欧の学術研究と教育のために諸術調所を設けた。教科の内容は、航海・測量・砲術・築城・造航・化学器械といった諸学で、その教授役は蘭学者の武田斐三郎であった。外国人から文化を吸収

して教育普及する学問所ができていたのである。だが、箱館港に入港する外国船は、アメリカやイギリスの船が多くオランダ語はさして役に立たなかった。

新島七五三太は、諸術調所を訪れるが、武田斐三郎が江戸表に出向いていたこともあって、ロシア領事館に居留する。

安政元年（一八五四）、ペリー来航によって翌年伊豆下田と箱館が開港する。箱館では安政四年にアメリカの貿易事務官のライズが初めて着任し、翌五年にロシア領事ゴシケヴィチと医師、司祭、士官など十五人が着任する。新島裏の「箱館紀行」にはロシア病院などが書かれているが、元町に領事館と病院が建てられてからのことである。イギリス領事ホジソンは安政六年に着任し、フランス領事を兼ねていた。

この年、箱館港が自由貿易港となった。アメリカの船が十隻、イギリスの船九隻が入港しているが、翌万延元年には三十隻の外国船が入港し、元治元年（一八六四）になると七二隻が入港、イギリス四七隻、アメリカ一七隻とイギリス、アメリカが多く、ベルリン号も入港していた。

新島七五三太が箱館に滞在していたとき、最も大きな影響を受けたと考えられるのはロシアである。ゴシケヴィチ領事、ニコライ司祭がいたときであるが、元治元年にはロシア船が一隻も入港していなかった。ニコライ司祭は、新島の密航を知り、前日に写真を写すように推めた。この写真は、初代駐日領事でもあったゴシケヴィチが撮影したもので、同志社に保存されている肖像写真が、日本に残されている唯一の写真でもある。

箱館では、諸術調所（武田塾）塾頭の長岡藩士菅沼精一郎、土佐藩士で坂本龍馬の従弟にあたる沢辺琢磨（山本数馬）とも親交があり、沢辺琢磨は、神明社の宮司で剣道の指南役を務めていたが、福士屋卯之吉に新島を紹介したのも彼であった。

新島裏にとって、福士成豊との友情は生涯何人よりも固い絆で結ばれていた。それは、新島が渡米してからの第一報と写真で両親にあて、箱館の福士に送っている。新島が帰国して再会し、札幌の福士宅に避暑と病氣静養のため寄寓したり、新島から福士に宛てた書簡でもうかがい知ることがで

きる。

二人の厚い友情は、幕末の西欧文明にかけた大志であり、時を同じくして会えたことにある。福士が果しえなかった西欧渡航の夢を新島に託したのでないかと思われる。福士二十七歳、新島二十二歳のときであった。

卯之吉は、船匠といわれた統豊治の末子として生まれ、五歳のとき回船業の福士屋長松の養子となり、実父に師事して造船技術を学んでいた。卯之吉が西欧文化に魅せられたのは、安政元年にペリー艦隊がはい次いで箱館に入港して士官らが上陸したときであった。洋服のいでたちや大砲、蒸汽船やスクーネル型の帆船などである。その驚きは、どれほど強烈に胸に焼きついたことであろうか。箱館奉行が事の重要性から幕府に蒸汽船の下げ渡を申請し、外国船の模倣を統豊治に命じた。豊治五十九歳、卯之吉十八歳のときで、卯之吉は父に代って碇泊の外国船に乗り組み、その細部を記録して名称などを知った。外国語を直接耳にしたのは英語であった。初めてみる器械や道具、調理用ストープなど珍らしいものは

記録にとどめ、初めに英語を覚えた。

完成したスクーネル型の洋式船は、外国人の指導を受けずに日本人の手でなした。箱館丸と名付けられ、船体すこぶる堅牢で速力も速く、箱館の洋式船は有名になった。次いで亀田丸などが建造し、武田斐三郎も乗船してニコライエフスクや黒龍江などにおもむいた。

卯之吉は、万延二年（一八六〇）正月、英語の「万用手控」を完成した。裏面の墨書「船大工福士屋卯之吉」とあるように、洋式船の船大工で、このとき英語に精通していた。

万延二年は、続豊治が箱館奉行の命を受けて運送船を建造していたが、一方では奉行が大町に築島の外人居留地を造っていた。卯之吉は、文久元年に運送船の豊治丸が完成すると、外人居留地の外国人に接していった。

築島は、海岸を埋立てた二千坪で、周囲と中央に通路があって、十区画の外国人貨渡地があった。役人が常に監視できるようになっていて、入口に橋があり、中央の通路の先に小舟をつける渡戸場があった。こ

の港湾に面する一角に監視の運上所の改所があった。

十区画の借受人は、六人のアメリカ人、三人のイギリス人とロシア領事のゴシケヴィチであった。入口の橋を渡るとくずに大好きのポーターがいて、中頃にゴシケヴィチ、渡戸場に近くW・ピッツが住んでいた。卯之吉は、アメリカ代理領事であったピッツから英語を学んでいた。新島七三太が箱館を訪れる前から、卯之吉は英語の達者な日本人として外人居留地では顔を知られていたし、ポーター商会の書記もしていた。

卯之吉が作った英語辞典は、二冊しか見ることができなかったが、共に横罫の入ったノートで外国人からもらい受けたもので、万延二年の「万用手控」は、五一に分類した件名別辞典で見出しがある。綴織の雄蝶と雌蝶の表紙の「英和辞典」は、アルファベットの見出しがある。共にペン書きで、頁の左に英語、右に和訳があるが頭をそろえて、ほとんどが片仮名で書かれている。当然漢字を用いるところも片仮名が用いられ、和訳はノートを横にして縦書きで

ある。名詞が多い。福士の天体観測記録もきれいな英語で書いている。和訳の片仮名は、日本語を知らない外国人に日本語を教えるためのものと考えられる。福士は、明治になって通訳を命ぜられてもいる。「新島先生書簡集」に「元治元治五月二四日に英国商館の書記」と卯之吉を説明しているが、書記の解釈はいろいろできる。元治元年は、年間七二隻も外国船の出入りがあった。卯之吉は外国人の応対に多忙を極めていた。短時間でいとも簡単にベルリン号のW・T・セーヴォリー船長と新島を会わせ、その二日後の夜半箱館港外に碇泊中のベルリン号まで小舟を漕いで乗船させたことなど、卯之吉は、外国人や運上所の役人にも信望があった。

武士の思立（田）の山も美す（じ）錦の衣もきざればなと帰るべき

新島七三太手記

卯之吉もまた偉大な足跡を残した人である。

（昭和三十三年大学経済学部卒業・市立函館博物館学芸員）

西郷隆盛が招いたロシアの革命家

渡 辺 雅 司

明治七年（一八七四）五月二十七日、朝霧に包まれた横浜の港に一隻のフランス郵船が投錨する。《ヴォルガ》という名のこの船には、文部省の帰国命令を受けた十七名の日本人留学生にまじって、一人のロシア人が乗り合わせていた。彼の名はレフ・メーチニコフ（一八三八一—一八八八）、パストゥール研究所の教授として、のちにノーベル医学賞を受けた細菌学者イリヤ・メーチニコフの実兄で、ヨーロッパ各地の革命運動に参加した現役の革命家である。五九年に亡命して以来、中近東、ヨーロッパ各地を流浪した彼は、イタリアではかのガリバルディの千人隊の副官として、ナポリ攻略戦を指揮し、一足を失っていた。また国際的アナキストとしてバクーニン、ゲルツェン、ルクリュ兄弟、ファネッリ

等と親交の深かった彼は、六八年にはスペインにバクーニン主義伝道の旅をし、バルカンの民族運動に加わり、その後第一インター（バークニン派）の盟員として、パリ・コンミュンの救援活動にも奔走した経歴の持主である。

ではどのように華々しくも危険な過去を持つ人物が、よりによってなぜ極東の島国へとやって来たのか？その背景には、実は幾つもの偶然の出会いがあったのである。まずはのちの陸軍元帥大山巖の日記に注目しよう。一八七三年九月十八日、当時ジュネーブ留学中の大山はこう記している。「夕景、一人ノ魯西亜人來ル、能ク日本語を解ス、其内ニ同行センコトヲ乞フ、依テ同車ニテ行キ、夜八時

帰ル、此人ハ仏ニテ我語ヲ学ビタリトテ能ク

字ヲ読ム、我モ大ニ便ヲ得タリ、故ニ一字ツツ互ニ教ヘルコトヲ約ス」と。この「魯西亜人」こそ、メーチニコフにはかならない。だがメーチニコフが大山の師であったことから、従来も少数の研究者のあいだでは知られていた。ではなぜ両者は出逢ったのか？

長いことこれは謎であったが、最近私はそれを解く鍵を入手した。メーチニコフの「明治維新論」についてはすでに紹介した（拙訳『「命ロシア人」の見た明治維新」、講談社学術文庫）ことがあるが、それ以外に彼は詳細な日本回想記をも残していたのである。「日本における二年間勤務の思い出」（邦訳名「明治維新への旅」、岩波文庫近刊）と題したこの回想記は、ロシアの代表的日刊紙『ロシア報知』紙上に、一八八四年から翌年にかけて、十四回にわたって不定期に掲載されていた。そしてそこにはこれまでまったく知られていなかった意外な事実が、メーチニコフ自身の口をとおして語られていたのである。

冒頭、彼はコンミュン敗北後のパリで、維新革命勃発のニュースを知った時の興奮を語り、そこから革命的東洋vs反動的西欧なる図式を着想したと書く。すでにペテルブルク

の東洋語学校でベルシャ語とトルコ語を学び、西欧諸語を含め十三カ国語を解していた彼は、矢も楯もたまず日本研究を志す。パリ大学日本語科の奇人ロニ教授に師事して漢字の修練を積んだ彼は、教授の紹介でジュネーブ滞在中の「日本の若き大名」の宿舍を訪れる。ところがそこに大名の姿はなく、かわって彼を招き入れたのは、「フランス語がわからぬ……やけに幅広の顔に極小の鷹鼻を置いた日本人」だった。この日本人が大山巖である。かくて二人は日仏語の交換教授を開始し、数カ月でメーチニコフは日本語をほぼマスターしてしまったという。当時彼にはロシア秘密警察の密偵がつけられていたが、大山はそれと知りつつ、この国際革命家を師と仰ぎ、一年半にわたり毎日のように往き来したのだった。

だが大山がいかに有力者とはいえ、つぎに述べる第二の偶然の出逢いがなかったならば、メーチニコフの日本行は実現しなかったであろう。一八七三年六月、世界歴訪の旅を終えた岩倉使節団が、ジュネーブを訪れた時のことである。駅頭に一行を出迎えた大山は、随員たちにメーチニコフを自分の師とし

て紹介した。またそれに先立って単身帰国の途についた木戸孝允も、この地でメーチニコフと邂逅、両者が将来の日本の政体をめぐって、意気投合したことは木戸の日記やメーチニコフの記述からも窺い知ることができる。そしてこうした元勳たちとの親交が機縁となつて、メーチニコフは七四年の早春、江戸における薩摩人子弟のための私立学校の設立者として来日するようにとの招聘を受けるのである。この雇入れの責任者は江戸の薩摩派の巨頭、兵部卿の西郷隆盛、寄寓先は西郷の実弟従道（つぐみち）の新居と指定されていた。

だが横浜に来たものの、西郷の使者らしき者の姿はない。おまけに周囲から聞えてくる横浜弁は、ジュネーブで「人の好い将軍」から習った日本語とは似て非なるものだった。

しかしさすがは名うての革命家、即座に事の真相を察知する。西郷が政治的に窮地に陥ったにちがいないと。すでにシンガポールの英字新聞は、岩倉暗殺未遂、佐賀の乱のニュースを報じていた。日本で第二革命が起つたのだ。このニュースに帰国留学生たちは浮き足だつた。だがインテリが逆境にいかにも弱いものであるかは、ナロードニキ系の革命家のメー

チニコフには周知のこと、彼は目に一丁字もない横浜の商人源次郎（ゲンジロウ）をもっぱら友として、日本についての予備知識を蓄えるのであった。「この源次郎こそは、私のもっとも貴重な話し相手、道連れであった。……彼の口から私は日本の実生活の細々した事柄や特徴を知らされた。そうした事柄は、どんな書物にも書かれていなかったし、パリの教室や遊歩道を徘徊していた日本のサムライや、遠く日出ずる国でナポレオン流の進歩や中央集権化をもくろんでいた彼らの上司たちには、てんでわかっていなかったことなのだ」

西郷は征韓論に破れ鹿児島へと去り、従道は台湾征討軍の指令官としてすでに長崎を出港していた。業を煮やしたメーチニコフは招聘の任に当った高崎正風の屋敷に単身乗りこむ。そこで高崎の口から、学校計画が頓座したこと、ついで文部卿の木戸の奔走で開学まもない東京外国語学校魯語科の雇入れに回されたことを知ったのだった。

およそ官と名のつくものが嫌いなアナキストのメーチニコフには、官立の外国語学校教授のポストも不意だったようだが、与えられた場でおのれの思想を試すのもまたナロ



サムライ姿のメーチニコフ

ードニキに共通する心性である。ここではシベリア学の先駆者の大部分が、流刑されたナロードニキであったことが想起される。メーチニコフの日本滞在の最大の目的は、維新革命をなし遂げた日本の民衆の内的エネルギーの源を探り出すことであつた。当時の魯語科には全国から向学心に燃える若者が殺到し、なかには幕末の動乱をくぐり抜けたサムライも混じっていた。これらの生徒たちに百科全書派を思わせる該博な知識をもって、数学と歴史を講じたメーチニコフは、生徒たちから絶大なる信望を得ていたという。わずか一年半の在任期間ながら、メーチニコフによって魯語科にもたらされた虚無気質が、その後の亡命系教師にも受けつがれ、生徒のなかから自由党きつてのロシア通とされる飯田事件

の首謀者村松愛蔵や、文学を通じてロシアの余計者群像をわが国に紹介した長谷川二葉亭、瑳瑤屋お室等が輩出されることになる。さらにこの外国語学校で、メーチニコフがもう一人の重要人物と出逢っていたことも忘れてはなるまい。その人の名は中江篤介、すなわち兆民である。明治八年二月、校長として外国語学校に着任した兆民とメーチニコフがどのような交際を持ったかは目下のところ不明だが、二人には飯塚綱（のちの民権家、詩人。メーチニコフとはパリ時代の友人）という共通の友もあつたから、相当つっこんだ話をしたとは予想される。現に「兆民居士はこのメーチニコフほど仏語の雄弁な者は仏人のなかにも少ないと評していた」と横山健堂は伝えている。

だが日本におけるメーチニコフの姿を、これら錚々たる知識人との交際によつてのみ描き出すのは片手落ちである。授業のかたわら彼は不自由な足をひきずつて街に出、貪欲に庶民ともまじわつ

ていった。半裸で入墨姿の「野蛮」な別当や車夫が、じつは西欧「文明」国の庶民には例のないほどの知的好奇心と良識の持主であることに驚嘆し、こうした日本の民度の高さを日本史の古層にまで踏みこんで検証していき、その成果は、七〇〇頁におよぶフランス語の大著「日本帝国」（一八八一年、ジュネーブ）となつて結実するのである。そこには日本の歴史、地理的記述とならんで、メーチニコフの専門ともいふべき民俗学的観察がついて画家を志した彼自筆の挿絵とともに詳細に記録されていた。

どうやら私はメーチニコフの日本行を「偶然の出逢い」という言葉で説明しすぎたようだ。たしかに強運としか言ひようのない出逢いがそこには数多くあつた。だが千載一遇のこうした出逢いをみずからにひき寄せたのはやはりメーチニコフの不屈の意志であつたろう。それを私は「維新日本への革命的ロマンス」あるいは「日本へのヴ・ナロード（民衆の中へ）」と名づけたのである。

（大学法学部教授）

詩人尹東柱を想う

宇治郷 毅

一、詩人との出会い

心をとらえてはなさぬ一人の詩人がいる。

韓国の詩人で、名前を尹東柱^{ユン・ドンジュ}という。私がこの詩人の名前を初めて知ったのは同志社の学生の頃であるから、あれこれ二十年ほど前のことだ。河原町の古本屋でふと手にした『朝鮮詩選』（許南麒訳編、一九五五年刊）というちっぽけな本の中に、その詩人の詩一篇と略歴が紹介されていた。

「白い手拭で黒い頭を包み

白いゴム靴をひび割れた足にひっかけてた

白い上衣と下裳が悲しい肉体をおおい

白い帯がやせた腰をぎゅっと締めつけた

一九三八・九〈悲しい族属〉

（一九一七年、中国閩島に生る。京城延禧専門学校を経て、京都同志社大学に在学中、被検。福岡刑務所で服役中、一九四五年獄死。）

当時の私には、この短い詩のもつ深い意味を理解する力はなかったが、こんな先輩もいたのかという何か複雑な感慨と、尹というめずらしい名前がつよく印象に残った。

卒業後私は東京のある図書館に勤めたが、仕事上の必要から朝鮮語を学び、しだいに朝鮮への関心を深めていった。一九七〇年夏、私は初めて韓国を旅行したが、その時ソウル

の延世大学（戦前の延禧専門学校、キリスト教主義の総合大学）を訪問する機会があった。見学の最後に、案内の大学関係者は私を構内の静かな丘の上に導き、この大学の有名な卒業生の記念碑だと言って、誇らしげに一つの詩碑を紹介した。碑には韓国語で「尹東柱詩碑」とあり、次の詩が刻まれていた。

「死ぬ日まで空をあおぎ

一点の恥なきことを、

葉かげにそよぐ風にも

私は心痛めた。

星を歌う心で

すべての死にゆくものを愛さねば

そして自分に与えられた道を

歩みゆかねば

今宵もまた、星が風に吹きさらされる。

一九四一・一一・二〇〈序詩〉

私は遠い記憶を呼びさまされたような気持ちで、この詩をむさぼり読んだ。そして、この清澄な抒情と凛烈な殉教精神をたたえた詩に心うたれた。尹東柱との再会であった。

私はこの時初めて、尹東柱という詩人が韓国の青年達に最も愛されている詩人であるこ

と、この詩人には『空と風と星と詩』という有名な詩集があることを知った。また、この詩人は「民族的抒情詩人」「抵抗詩人」として韓国詩壇ではつとに不動の地位を占めていることを知った。私はソウルの本屋でこの詩人の詩集を買い求めて帰国したが、以後この本は私の座右の書となっている。

二、詩と祖国―尹東柱の世界

尹東柱は「暗黒期」と呼ばれた一九三〇年代、四〇年代を植民地の民の一人として生きた。帝国主義と戦争の嵐が吹きあれた暗く厳しい時代であった。彼は二十八才の短い生涯を何を願い、何を求めて生きたのか。中学までの「満州」時代、ソウルの延禧専門学校時代、東京と京都の日本留学時代、何ゆえ彼はかくまで遍歴を続けねばならなかったのか。今彼を知る友人、親族はほとんどいなくなった。なおかつ彼の日記や作品は、京都における逮捕時にすべて下鴨警察署に没収されてしまっている。今彼を知る唯一の手掛りは、かろうじて残された一冊の遺稿詩集だけである。この詩集には、中学時代の一九三四年か

ら立教大学時代の一九四二年までに書かれた一六篇の詩、童詩、散文が収められている。朝鮮語の禁止されていた当時、自国の言葉で詩を作り、思索をかさねた詩人は、この詩集の中にあたかも暗黒の空に輝く星のごとき珠玉の詩を書きのこしている。それは「死ぬ日まで空をおおぎ、一点の恥なきことを願った詩人の魂の結晶であった。

渡日直後に書かれた次の詩には、詩と祖国を愛した彼の心情がよく吐露されている。

窓の外に夜の雨がささやく

六畳部屋は他人の国

詩人とは悲しき天命であると知れど
いざ一篇の詩をつづってみよう、

汗の匂いと慈愛の香りにむれた

送られてきた学費封筒を手にして、

大学ノートを小脇に

老いた教授の講義を聴きに行く。

思えば幼き頃の友達

ひとり、二人とみな去りゆき、
私は何に望みをかけて
ただひとり、思い沈むのか？

人生は生き難しというのに
詩がこうもたやすく書けるというのは
なんと恥ずかしいことだろう。

六畳部屋は他人の国
窓辺に夜の雨がささやく、

電灯をつけて 暗闇をすこし追いやり、
時代のように 来る朝を待つ最後の私、

私は私に小さな手をさしのべて
涙と慰安をこめた最初の握手をする。

一九四二・六・三へたやすく
書かれた詩

この詩には、敵国日本の首都東京に創氏改名（尹東柱は平沼東柱と改名）までしてやってきた青年の深い孤独感がにじんでいる。希望をだいてきたはずの留学生活ではあったが、はやくも失望と挫折感にとらわれていく。学費封筒を手にするたびにこみあげてく

るのは望郷の想いだ。満州の原野を走りまわった少年時代、親しい友人に囲まれて文学に熱中した古都ソウルの日々。そして今、友人は去り、六畳部屋に孤立している自分を見出す。しかし彼は、「六畳部屋は他人の国」と認識することによってのみ、真の祖国が何であるかを確信する。そこには、生き難い人生を一篇の詩を書くことによってしか自己を確認できぬ天性の詩人がいる。フランシス・ジャム、リルケ、ジイドを愛したこの心やさしい抒情詩人は、この詩を書いた数ヶ月後には新しい勉学の地を求めて京都同志社に転じた。

三、尹東柱と同志社

尹東柱が同志社に入學したのは一九四二年十月、文学部文化学科英語英文学専攻の選科生であった。翌年七月には治安維持法違反の疑いで逮捕されているから、同志社在学は一年足らずのことだ。京都でも東京時代と同じく、詩作と読書に明けくれる孤独の日々を送っていたようだ。今までの調査によると、同志社時代の尹東柱を記憶している日本人は一

人もいないようだ。また当時の日記や作品がすべて警察に没収されているので、彼を知る手掛りは非常に少ない。最近関係者の努力で官憲側の資料が発掘されたが、その内容も「独立運動」として無理矢理デッチあげた感じの強いものであった。

一九七七年十一月、尹東柱の実弟尹一柱氏（ソウルの成均館大学教授、昨年逝去）が同志社を訪問し、ありし日の兄を偲んでいる。その時の訪問記（「胸には苦楚のあと」）によると、氏は故上野直蔵総長と面談している。総長は尹東柱については記憶がないが、彼の友人であった張（白野）聖彦（英文科出身、在米）氏はよく覚えていると述べ、尹教授に厚い同情を寄せている。その時尹教授が入手した尹東柱の学籍簿、成績表によると、彼は英文学史、英文学演習、英作文、新聞学を受講していた。また彼は一九四五年二月福岡刑務所で獄死しているにもかかわらず、同志社では一九四八年十二月まで在籍になっていたという。混乱期の大学とはいえ、不思議なことである。ただ尹東柱が逮捕された事件（「在京都朝鮮人学生民族主義グループ事件」という）の連累者であった京都帝大選科生宋夢奎

の場合、逮捕半年後に京大から放學処分になっているのに比べ、尹東柱の場合は大学側の何らかの配慮があったと推測される。

今私は同志社に学んだ者として、また何よりもこの不滅の抒情詩人のため、より新しい資料の発掘を願わずにはいられない。

（昭和四十一年大学法学部卒業、同四十二年法学研究科修了、国立国会図書館司書）

参考文献に『空と風と星と詩 尹東柱全詩集』（伊吹郷訳、記録社、一九八四年刊）森田進「尹東柱ノート『空と風と星と詩』の世界―（「弦」創刊号、一九八五年秋季）尹一柱「胸には苦楚のあと」（『文学思想』一九七七年十二月号、韓国文）

